

I. 業務の内容

1. プログラム名	令和4年度女子中高生の理系進路選択支援プログラム
2. 企画名	リケジョ育成のためのプログラミング教育と実験的学び ～環境と防災をテーマにして～
3. 実施期間	令和4年5月1日～令和5年3月31日
4. 実施機関	<p>実施機関名：京都光華女子大学</p> <p><契約担当者> 所在地：〒615-0882 京都市右京区西京極葛野町38 役職名：学長 氏名：高見 茂</p> <p><実施責任者> 所在地：〒615-0882 京都市右京区西京極葛野町38 役職名：学長 氏名：高見 茂</p>
5. 本企画における 全体の目的	<p>◆企画全体の目的</p> <p>近年、環境問題や異常気象・地震により、多くの方が命を落としている。このため文部科学省は環境と防災に関する教育・研究を強力に推進している。女子中高生の中には、世界中で苦しむ環境難民や、辛い（特に、女性の）避難所生活に心を痛めたものも多いただろう。このような環境・防災分野は生活に密接に関係した分野であり、かつ、女性の活躍が大いに期待される分野であるが、その専門性は高度な理系分野でもある。そして、この理系分野については同省がSociety5.0の時代に対応できる人材育成として、その基幹領域に<u>プログラミング教育</u>を提示している。</p> <p>そこで本プログラムでは、環境・災害をテーマとして、<u>プログラミング教育と実験を通じた理系女子育成の観点から</u>、一人でも多くの女子中高生が環境・防災教育をきっかけに理系進学（特に、工学部・理学部）をめざすことを目的とする。</p>

6. 業務項目別線表（結果）

業務項目（取組）	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
① 概論授業とプログラミング教育		2	1	1	1	1	2		1		1	
② 環境・防災サイエンスツアー				2	1	1						
女子中学・高校訪問			1				1					
広報用パンフレットの制作											1	
特設ホームページの更新&動画コンテンツ作成											1	
教育委員会、教科ワーキング、京都府私立小学校・中学高等学校連合会を通じた広報			1	1	1							
参加機関との定例会							1					1

7. 企画の成果とその分析、自己評価

7-1. 当該年度における達成目標に対する実績

達成目標に対する実績					
<p>◆参加者到達目標（令和4年度）の目標</p> <p>女子中高生延べ260名以上 うち女子中学生110名以上・女子高校生150名以上 保護者35名以上・中高教員35名以上</p> <p>◆令和4年度の実績</p> <p>女子中学生39名（達成率：35%）・女子高校生262名（達成率：175%）・合計301名（達成率：116%） 保護者9名（達成率：26%）・中高教員37名（達成率：106%） 総参加者数：347名</p>					
達成目標と実績					
大項目	中項目	小項目	目標	実績	注記等
参加人数	女子中高生	中学1年生 (中等教育学校1年生)	60人	6人	
		中学2年生 (中等教育学校2年生)	50人	32人	
		中学3年生 (中等教育学校3年生)	0人	1人	
		高校1年生 (中等教育学校4年生)	70人	138人	
		高校2年生 (中等教育学校5年生)	80人	104人	
		高校3年生 (中等教育学校6年生)	0人	20人	
		小計	260人	301人	
	保護者	35人	9人		
教員	35人	37人			
広報活動	マスメディアへの取り扱い回数	2回	1回	機関誌等を含む。	
(備考)					

達成目標に対する実績（内訳）

取組内容	実施日	実施場所	募集対象		参加者内訳								合計	
			対象者	人数	中1	中2	中3	高1	高2	高3	保護者	教員		
① 概論授業・ プログラミング教育	5月12日	京都府立東稜 高校	女子高生 教員	-						6			3	9
	5月19日	京都府立東稜 高校	女子高生 教員	-						27			2	29
	6月2日	京都府立東稜 高校	女子高生 教員	-						29			3	32
	7月7日	京都府立工業 高校	女子高生 教員	-						22			2	24
	8月27日	帝塚山学院高 校	女子高生 教員	-							13		1	14
	9月16日	京都府立北稜 高校	女子高生 教員	-						10			4	14
	10月6日	京都光華女子 大学	女子高生 教員・保護者	80						6		0	2	8
	10月29日	日星高校	女子高生 教員	-				6					1	7
	12月13日	京都光華女子 大学	女子中学生 教員	50		28							3	31
	2月8日	兵庫県立川西 緑台高校	女子高生 教員	-				115					10	125
② 環境・防災 サイエンスツ アー	7月10日	京都大学 芦生 研究林	女子中高生 教員・保護者	30				5	1	2	3	2		
	7月12日	京都光華女子 大学屋上庭園	女子中高生 教員・保護者	-	1			4		2		1	8	
	8月2日	大阪科学技術 センター	女子中高生 教員・保護者	-	4	4	1	3	2		4	1	19	
	9月18日	京都大学 上賀 茂試験地	女子中高生 教員・保護者	20	1			5	1	3	2	2	14	
計 ※入力不要					6	32	1	138	104	20	9	37	347	

【特記事項】

※募集対象の人数は、定員を設けていない部分は「-」とし、数値を入れている部分は特に内訳を設けていなかったため合計人数を記載している。

7-2. 業務計画に対する結果の詳細

【1】取組

取組①：概論授業・プログラミング教育		
時期	5～2月	<p>【1】女子中高生への取組</p> <p>①概論/プログラミング授業の実施</p> <p>防災と環境に関する概論授業とプログラミング授業を実施した。受け入れ校の要望に応える形で、理系進路の魅力などを伝える内容をテーマとする講義についても、①の取組として実施した。</p> <p>①-1 2022年5月12日（計画内） 場所：京都府立東稜高校，対象：女子高2（6名），教員（3名） 内容：「数字でみる京都の環境問題」と題して、概論授業を実施した。この授業では、最初に、日本全国におけるシカによる被害状況の推移について、グラフを用いて説明し、次に、京都府における被害状況や捕獲状況、さらにシカ肉利用状況について統計学的な観点から説明した。工夫：動物の頭数というカウントが困難なものでも、統計学的手法（高校でも習う中間値や信頼区間などの数学的説明を入れながら）を用いて、ある程度は推定されるという部分を詳しく説明した。担当教員以外にも声掛けし参加いただいた。</p> <p>①-2 2022年5月19日（計画内） 場所：京都府立東稜高校，対象：高2（27名），教員（2名） 内容：「相手に伝わる文章の書き方～理系の文章はビジネスシーンで役立つ～」をテーマに概論授業を行った。ここでは、典型的な文系の文章と、理系の文章を紹介し、理系の文章の場合は、誰が読んでも同じ解釈になることが重要であることを説明した。そして、ビジネスシーンにおいては、特に理系の文章が重要になる場合が多いことを説明した。工夫：授業終了後にキャリアガイダンスを実施し、進路選択においては自分の得意・不得意ではなく、好きかどうか重要であること、エンジニアや医師など、理系の職業から文系の職業に就くことはできるが、専門性の観点からその逆は難しいこと等を解説した。併せて、理系進路の魅力について、講師のエンジニアの経験を説明し、高校生の理系進路選択に関する情報を提供した。なお、当教員以外にも声掛けし参加いただいた。</p> <p>①-3 2022年5月19日（計画内） 場所：京都府立東稜高校，対象：高2（29名），教員（3名） 内容：内容や工夫については①-2と同様であるが、対象とする生徒が異なる。</p> <p>①-4 2022年7月7日（後から追加） 場所：京都府立工業高校，対象：高2（22名），教員（2名） 内容：「地球環境クライシス」と題して概論授業を実施した。近年の温暖化に伴う台風の大型化、降水量の増加などについて、2022年6月末～7月初めの記録的豪雨などを事例に、映像を交えながらそのメカニズムを紹介した。さらに、ウクライナ情勢と日本の電力の関係に触れた。工夫：数値やグラフなどを取り入れることで理系分野にも親しんでもらえるような内容とし、クリッカー（数値の並んだリモコンを生徒全員に</p>
対象	中学生・高校生 教員・保護者 ※実施内容より対象は異なる	
人数	中学生 28人 高校生 234人 教員 31人 保護者 0人	
形態	すべて対面	
場所	（対面の場合） ※主に実施中高校。内容より場所は異なる。	

	<p>配布し、こちらからの質問に数値ボタンを押して解答する教育ツール)を用いながら双方向型授業を実施した。</p> <p>①-5 2022年8月27日(後から追加) 場所: 帝塚山学院高校, 対象: 高3(13名), 教員(1名) 内容: 内容や工夫については①-4と同様。</p> <p>①-6 2022年9月16日(計画内) 場所: 京都府立北稜高校, 対象: 高2(10名), 教員(4名) 内容や工夫: 授業内容は①-1と同様であるが, 後述の環境・防災サイエンスツアーの一つである「里山サイエンスツアー2022」への参加を呼び掛け, 実際にツアーの参加につなげることができた。また, 教員については, 担当外の複数の教員にも参加いただき, 管理職(校長)にも参加いただくことができた。</p> <p>①-7 2022年10月6日(計画内) 場所: 京都光華女子大学, 対象: 高2(6名), 教員(2名), 保護者(0名) 内容: 最初に, 環境をテーマに, 本事業で開発したVR動画と購入した専用ゴーグルを使って, 森林における環境問題に関する授業を実施した。次に, エネルギー教育をテーマに, 発電所で電気が作られる仕組みや, 水素エネルギーについて, 実験を通じて授業を実施した。 工夫: VRを使った授業を初めて導入したが, その臨場感に生徒も驚いた様子であった。なお, 授業内の実験部分については, 連携機関の大阪科学技術センター(OSTEC)により実施された。保護者にはオンラインでの参加を呼び掛けたが, 参加者はいなかった。</p> <p>①-8 2022年10月29日(後から追加) 場所: 日星高校, 対象: 高1(6名), 教員(1名) 内容: 「女の言い分・男の言い分」をテーマに京都光華女子大学のキャリア形成学科教員2名が講義した。将来なりたい職業として, 研究者やエンジニアなどの理系職から文系職までを並べて選択してもらい, 男女に違いがあるかどうかを確認しながら講義を進めた。そして, 「モザイク脳」の概念について触れ, 本来, 男女間の能力や思考に差異はなく, 結果的に生じる差異は, 環境における後天的な影響が大きいことに言及した。そして, もし, 「女子だから理系を選択しない」と考える人がいたら, それは脳科学的にも根拠がないことで, 是非, 自信をもって理系に進学してほしい旨, 説明した。 工夫: 講義で使用した質問には, 前述のクリッカーを利用することで, 双方向型の授業を充実させることができた。</p> <p>①-9 2022年12月13日(計画内) 場所: 京都光華女子大学, 対象: 中2(28名), 教員(3名) 内容: 本学キャリア形成学科の女性教員による指導のもと, マルチエージェントシミュレータ artisoc を使いコンピューターの中に人口環境を作成した。 工夫: 最初は, 鳥の群れの動きをプログラミングした。ばらばらに動かす, 集団になって一定の規則で動かす, 動かす向きを変えるなど, 高校生にとって初めての経験でも, プログラミングに親んでもらうことができた。</p>
--	---

		<p>①-10 2023年2月8日（後から追加）</p> <p>場所：兵庫県立川西緑台高校，対象：高1（115名），教員（10名）</p> <p>内容：「大学での学びについて」と題して，講義を実施した。ここでは，「人文科学」「社会科学」「自然科学」の学問体系を紹介し，それぞれの科学にける大学の学部や学科について，具体的に説明した。さらに，大学での学びは細分化しているものの，実際の社会課題（例えば，太平洋島嶼国におけるプラスチックごみ問題，海面上昇など）は，ひとつの学問からのアプローチでは解決は難しく，多くの専門性が必要になってくることを解説した。</p> <p>工夫：文系か理系か進路を考えるにあたり，理系に進んでも文系の仕事（例えば，会社の事務や営業として働くなど）に就くことはできるが（実際には多くの人がそうである），文系に進んでも理系の仕事（例えば，会社の研究職やエンジニア）に就くことは，専門性の観点から難しいことなど，具体的な事例を挙げて紹介した。</p>
--	--	--

取組②：環境・防災サイエンスツアー		
時期	7～9月	<p>②環境・防災サイエンスツアー</p> <p>週末を利用して親子参加型のフィールドワークや実験を取り入れた内容を実施した。</p> <p>②-1 2022年7月10日（計画内）</p> <p>場所：京都大学芦生研究林，対象：高1（5名），高2（1名），高3（2名），教員（2名），保護者（3名）</p> <p>内容：都会の喧騒を離れた幻想的な自然林の中でサイエンスツアーを実施した。シカやクマによる食害を調査しているエリアでは，これらの調査には極めて長い年月を必要とすることや，さまざまな最新技術が適用されていること，さらに，女性の研究者である京都大学の石原正恵准教授から森林研究の魅力や楽しさについてお話いただいた。</p> <p>工夫：芦生研究林長の石原先生から，専門的な研究内容のみならず，自身の女性研究者のキャリアについて，道中に語っていただいた。なお，募集には親子での参加を積極的に呼びかけた。</p> <p>②-2 2022年7月12日（計画内）</p> <p>場所：京都光華女子大学，対象：高1（4名），高3（2名），中1（1名），教員（1名）</p> <p>内容：教員から地球温暖化の現状や，屋上緑化によるヒートアイランド現象の削減効果，肥料の有効性や植物の品種改良など化学的な視点から園芸に関する話をした。ミニ講座後は，女子中高生がお花の寄せ植えにチャレンジした。</p> <p>工夫：女性中高生に関心がありそうな花の寄せ植えだけでなく，最初に化学的な観点から肥料や植物の成長に関するミニ講座を実施することで，理系への興味関心を高めるように心がけた。</p> <p>②-3 2022年8月2日（後から追加）</p> <p>場所：大阪科学技術センター，対象：高1（3名），高2（2名），中1（4名），中2（4名），中3（1名），教員（1名），保護者（4名）</p> <p>内容：ライオン株式会社の2名の女性研究員から，同社におけるSDGsの取組，環境への取組を紹介いただき，台所洗剤を利用した界面活性剤</p>
対象	中学生・高校生 教員・保護者	
人数	中学生 11人 高校生 28人 教員 6人 保護者 9人	
形態	すべて対面	
場所	京大芦生研究林 京大上賀茂試験地 京都光華女子大学 大阪科学技術センター	

		<p>の実験を行った。ここでは、界面活性剤がよごれを落とすメカニズムについて学ぶことができた。</p> <p>工夫：座談会では、女性研究員から大学進学の際、工学部を選んだ理由や、リケジョとしての研究所での1日のスケジュールなどを紹介していただいた。募集では、親子での参加を呼び掛けた。なお、本事業は、連携機関である大阪科学技術センター（OSTEC）と協力して実施したものである。</p> <p>②-4 2022年9月18日（2023年3月予定のものを前倒し） 場所：京都大学上賀茂試験地，対象：高1（5名），高2（1名），高3（3名），中1（1名），教員（2名），保護者（2名） 内容：本学教員からJSTプログラムの概要説明の後，京大上賀茂試験地の赤石助教より試験地の歴史や背景について説明いただいた。最初に，「竹」と「松」の貴重な資料が展示されている資料室を見学し，世界の植物について知ることができた。続いて，フィールドワークでは，目的地に向かう途中で生息している「きのこ」に注目し，森の中のきのこの役割について知ることができた。また，67年に1度開花するとされるモウソウチクの花も見ることができた。最後の質疑応答では，高校の先生から「文理に迷っている生徒に対する指導方法」や参加した高校生からは「これは何の種類のきのこ？」など，今回の趣旨やフィールドワークに関する内容の質問をいただいた。</p> <p>工夫：親子での参加を積極的によびかけ，直近の概論授業内でも本ツアーへの参加を呼び掛けた結果，概論授業の受講者からの参加があった。また，当日は，政府広報番組の取材も入り，後日，幅広く取組を認知いただくことができた。</p>
--	--	--

【2】効果的な活動（幅広い参加者募集、成果の普及など）

○女子中学・高校訪問（6月，10月）

本学の学生募集活動に合わせて，女子中学・高校訪問 49 校（該当エリアのすべての女子中高）の他，共学校を含めて約 200 校程度の中高校を訪問した。訪問の際には，これまでの取組内容や今後実施予定のイベントを紹介した。

○広報用パンフレットの制作（2～3月）

R4 年度の実績（アンケート結果を含む）を掲載した広報用パンフレットを 500 部制作した。一部を京都府教育委員会と大阪府教育委員会に配架した。残りは，本学の学生募集活動に合わせて，順次学校訪問で使用した。

○特設ホームページの更新&動画コンテンツ作成（2～3月）

本事業の特設ホームページに，アンケート結果等の実績を追加掲載した。また，ロールモデル提示の観点から，堀場製作所の若手女性エンジニアと京都大学理学研究科の学生が登場する動画を作成し，YouTube で配信している。（5月15日時点再生回数：堀場製作所（194回），京大（212回）。）

○教育委員会、教科ワーキング、京都府私立小学校・中学高等学校連合会を通じた広報（6～8月）

主に，環境・防災サイエンスツアー実施前に，参加者募集で協力いただいた。

○学会等での発表（7月，8月）

・日本環境学会第 48 回研究発表会（オンライン）（7月）

アンケート結果をもとに発表した。取組の中でも，「環境・防災サイエンスツアー」に参加した人の方が，「概論授業」に参加した人よりも理系進路選択に関心を抱く傾向にあることを報告した。

・日本女子大学 一貫教育推進委員会（8月）

日本女子大学は附属の小学校から高校までと連携し，一貫した STEAM 教育を目指している。今回は，本学の本プログラムの取組に加え，本学の併設校との連携状況等も報告した。なお，声掛けいただいたきっかけは，日本環境学会の会長が日本女子大学の理事を併任されているため，上記の学会発表がきっかけになっている。

○参加機関との定例会（10月，3月）

本プログラムに参加いただいた教員，教育委員会の統括指導主事に参加いただき，半期ごとに定例会を開催し，取組内容の振り返りと今後の事業内容について検討した。

【3】事業の継続性

京都光華女子大学の他，京都大学フィールド科学教育研究センターや連携機関のほとんどは既に社会貢献を目的とした出張講義システムが存在しており，幅広い学齢に対して様々な工夫を凝らした無料の出張講義を実施してきている。本プログラム期間では，本学がこれらの参加機関の出張講義システムを応用し，女子中高生に特化した理系進路構築プログラムを展開している。このため，事業終了後の中高校側の金銭的負担は少ないものと思われる。また，事業終了後も，本学については環境・防災サイエンスツアーを含め，出張講義に関するものはすべて自主財源で提供する。さらに，教育委員会等の定例会は継続し，事業内容の振り返りのみならず，京都府・大阪府を中心に，理系を選択する女子中高生の動向等は常にリサーチする。なお，現状の女子中高生の理系進路選択支援プログラム運営委員会では，適宜，計画書，報告書における相談・報告，PC 管理や各専門部署からの講師招聘等を行っているが，事業終了後の本学内の運営体制については，学内の大学運営会議（現在のプログラム運営委員会メンバーが参加）にて継続することとする。

7-3. 教育委員会と民間企業との協力内容について

<p>【1】教育委員会との協力内容 本事業の企画提案書提出時で既に2年間（R4～R5年度）の教育委員会の参加が確定しており、現在は、R4年度の事業が無事に終了したことを報告し（3月定例会）、R5年度以降も継続して教育委員会に支援していただくことになっている。</p> <p>【2】民間企業との協力内容 教育委員会と同様、事業の企画提案書提出時で既に2年間（R4～R5年度）の民間企業の参加が確定してお、R4年度では、ライオン株式会社と大阪科学技術センターからの授業提供、堀場製作所からは動画コンテンツ（女性エンジニアをロールモデルとして）を提供いただいた。これらの企業・団体については、R5年度以降も環境・防災サイエンスツアー等で中高校側からリクエストがあった場合には協力していただけるよう体制を継続している。その他、本事業の特設ホームページにおけるロゴの使用、リンク設定なども継続することになっている。</p>
--

7-4. 設定目標に対する自己評価

<p>目標の達成度</p>	<p>達成できた</p> <p>○どちらかという達成できた</p> <p>どちらかという達成できなかった</p> <p>達成できなかった</p>
<p>上のように判断した根拠</p>	<p>女子中学生と女子高校を分けて分析した場合、女子中学生の達成率は、35%（実績：39人/目標：110人）に留まっているが、女子高生の達成率は、175%（実績：262名/目標：150名）となり、大幅に目標値を超えることができた。次に、保護者については、達成率26%（実績：9名/目標：35名）であったが、教員については、達成率106%（実績：37名/目標：35名）となった。</p> <p>女子中学生や保護者に対して課題が残るが、今年度は特に高1の参加者が多かったことから「どちらかという達成できた」と判断した。</p> <p>なお、中学生の参加については、今後、教育委員会や私立中学校連合会などと連携し、中学生向けの広報に注力したい。保護者の参加については、これまで保護者向けにZoomによるオンライン授業参観等を実施し、その後キャリアガイダンスを行う等してきたが、これらに加えて、保護者向け動画などを配信することで、より訴求力のある広報に努めたい。</p>

7-5. 成果と分析、自己評価

アンケート（JST 指定）の結果をもとに、本事業全体の取組成果を分析する。Q3-1 単一回答「文系・理系のどちらを志望していますか。（取組参加前）」という質問に対して、取組み参加前では、理系進路希望者は2割強に留まっており、進路に迷っている生徒が約半数となっていた（図1）。

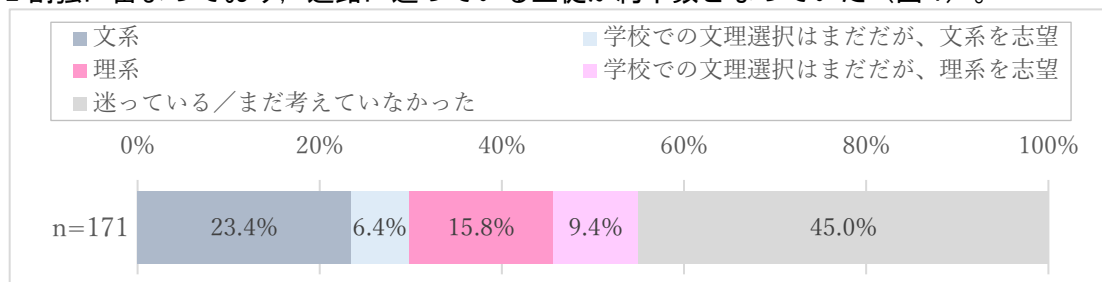


図1 文系・理系のどちらを志望していますか。（取組参加前）（N=171）

しかし、取組後では、Q7-2 単一回答「科学技術や理科・数学に対する興味・関心が高まった。」に対して、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した生徒が約8割となった（図2）。

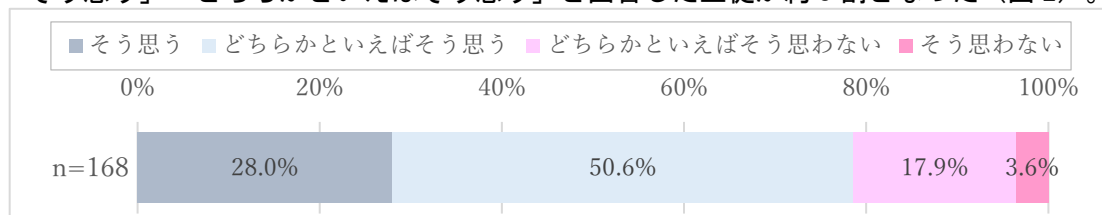


図2 科学技術や理科・数学に対する興味・関心が高まった。（N=167）

さらに、Q7-4 単一回答「理系の進路を前向きに選択しようと思うようになった。」に対して、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した生徒が6割強まで増加した（図3）。

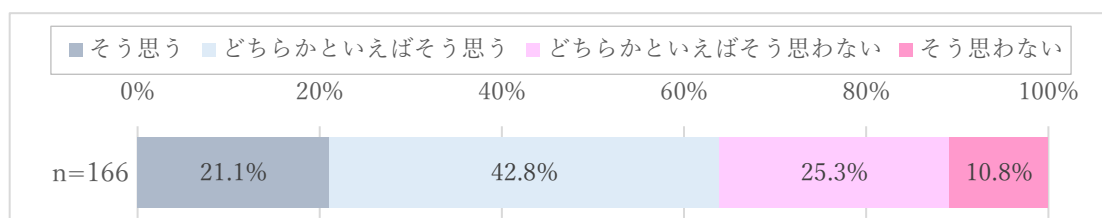


図3 理系の進路を前向きに選択しようと思うようになった。（N=166）

以上の結果から、環境と防災をテーマに、まず、概論授業にて社会問題の観点から学習し、その後、プログラミングや実験、フィールドワークへと展開するスキームを有する本事業については、文理選択に迷う女子中高生に対して、理系の魅力を伝えることができている、さらには、理系を選択するきっかけとなるような取組となっていると思われる。

8. 今後の課題と対応策

【1】今後の課題

本学が実施しているオープンキャンパスでは、ほとんどの女子高生は母親と参加している状況であり、この傾向は直近数年間で増加傾向にあるように感じている。推進委員のコメントにもあるように、生徒の進路選択については保護者へのアプローチが極めて重要で、このような傾向はその重要性を再確認するものとなっている。

ところで、本事業のテーマとなっている「環境と防災」については、関連する学士過程が理学、農学、工学（文科省が強力に推進している核となる理系分野）であり、近接する領域として社会学、生活科学などがある。しかし、本学には、近接する領域はあっても、核となる理系分野の学士を出す学部・学科がないため、オープンキャンパスと本事業はこれまで切り離して実施してきた。

ただ、事業報告書内にある通り、授業参観等の日々の学校行事には学齢が高くなるにつれ保護者は参加しないことが多くなる。このことから、高校生と保護者（母親）がほぼセットで参加するオープンキャンパスを利用することができれば、理系進路選択支援の効果は高まるものと思われる。

オープンキャンパスは狭義では主催大学が有する学びと高校生の興味・関心を結ぶ高大接続事業ではあるが、環境と防災が本学に必ずしもない学士分野ではあっても、広義の意味での高大接続の観点から、このようなチャンスを利用できないか、本学入試・募集関連部署との協議を進めていきたい。

9. JSTへの意見、要望

特になし

II. 業務関係者一覧表（結果）

区分	本件業務での役割	氏名	所属		具体的な実施業務内容	従事期間	人件費・謝金支払	専従者・兼務者の別	緊急連絡責任者
			機関名・研究科 学部・担当等	役職名					
実施機関	実施責任者	高見 茂	京都光華女子大学	学長	実施責任者	2022年5月～2023年3月			
	契約担当者（対JST）	高見 茂	京都光華女子大学	学長	契約担当者	2022年5月～2023年3月			
	実施主担当者	高野 拓樹	同大学・環境教育推進室	教授・室長	本件業務の実質的責任者	2022年5月～2023年3月			○
	連絡担当者	藤原 加織	同大学・学長戦略推進部	部長	本件業務にかかる事務	2022年5月～2023年3月			
	経理担当者	杉本 悠子	同大学・学長戦略推進部	部員	経理全般の窓口	2022年5月～2023年3月			
	業務参加者	間浦 幹浩	京都光華中学高等学校・環境教育推進室	教諭・室員	併設する女子中高との連携	2022年5月～2023年3月			
共同機関	共同実施担当者 （実施責任者兼務）	高見 茂	京都大学・地域連携ユニット	特任教授	京都光華女子大学と京都大学との連携担当	2022年5月～2023年3月			
連携機関	業務協力者	加藤 有一	関西電力・大阪科学技術センター・国際高等研究所	国際高等研究所専務理事	主にサイエンスツアー担当	2022年5月～2023年3月			
	実施担当者	田中 誠樹	京都府教育庁・指導部高校教育課指導第2係	総括指導主事	中高への広報・定例会参加	2022年5月～2023年3月			
	実施担当者	松下 信之	大阪府教育庁・教育振興室高等学校課教務グループ	首席指導主事	中高への広報・定例会参加	2022年5月～2023年3月			

Ⅲ. 業務体制図（結果）

